

平成 29 年度第 2 回入学試験問題

国 語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから8ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・座席番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎカッコ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一 次の文章は干刈あがたの小説「黄色い髪」の一部です。問題文は、主人公である柏木夏実が吉田典子にいじめられていた藤山里子をかばったために、周りから「良い子ぶっている」と言われるようになってしまった後に続く文章です。これを読んで、後の問に答えなさい。

「よし」

と金村先生が、一ページ分を読み終わった生徒に言った。

「この章では、田宮虎彦という人の書いた『沖繩の手記から』という文と、吉村昭という人の書いた『前野良沢』という文について勉強するんだね。前野ヨシザワじゃないよ、前野リョータクという人の名前だよ、いいね。ではつぎのページ、神田」

座席順で神田隆が立ち、読み始めた。金村先生は左手に教科書を持ち、右手に（愛のムチ）を持って机の間を歩いている。

「沖繩の手記から。田宮虎彦。昭和二十年三月二十六日、アメリカ軍は、沖繩の西方にある慶良間列島に上陸、次いで四月一日には、沖繩の嘉手納海岸に上陸した。戦局は、すでに敗色 a ノウコウとなっていた。軍医大尉のわたしは……」

神田隆はすらすらと読んでいく。夏実は前のページに書いてあったことがどうしても気になるので、そつとページを戻してもう一度黙読してみた。《もしも美しいまつ毛の下に、涙がふくらみたまるならば、それがあふれ出ないように、強い勇気をもってこらえよ》。胸がじんとするような言葉だけれど、どうも意味がよくわからない。涙がふくらみたまるような時つて、たしかにある。夏休みにバドミントン部の人たちと喫茶店に入った時。かわいそうな人を見た時。大切にしていた物が壊れた時。何かに感動した時も、涙がふくらんでくる。

でも、1 強い勇気をもってこらえよつて、どういふことだろう。《真実に生きることは、楽しいものとはかぎらない。それはしばしば人に、あふれ出る涙をこらえる勇気を要求する》。どういふことだろう、えーと、b ガマンしろつと鳴った。「あッ」と思った瞬間、机がバシツと叩かれた。

机の列のあいだをうしろから歩いてきた金村先生が、（愛のムチ）で机を叩いたのだった。夏実はあわてて教科書を一ページめくつた。

「よし」と先生は神田隆に言つてから、座席順に朗読させていたのを急に變更した。

「柏木、つぎを読む」

夏実はどこから読んだらよいのかわからなかつた。見当をつけて、段落のつぎから読み始めた。

「ふと目覚めると、目の前に包帯を探しに來た娘がいた……」

「そこか？」

先生が教室のみんなに聞いた。誰も返事をしない。笑う者もないが、教えてくれる者もない。それは自分が無視されているからではなく、授業中は誰も他人のことは関係ないのだと夏実にはわかつている。答えられないのは、頭が悪いか、勉強しなかつた本人の責任なのだから。

「つぎ、木下。柏木は立っている」

と先生は朗読の順番を戻し、臙脂色のスカートをやつたりと揺らしながら前の方へ歩いていった。

「わたしは負傷者たちの一人一人の処置をして回つた。自分で動ける負傷者など一人もいなかった……」

夏実は立つたまま教科書を持ち、朗読の声を聞きながら文章の行を眼で追つた。2 体が熱くなり、頭がボーツとして、一行一行の意味などわからない。

傷を負つた兵隊を助けている人の幻が、うつむいている教室のみんなの上に浮かんでいる。眼に涙がふくらんできたが、じつところらえた。みじめさ、やりきれなさ、寂しさ。勇気をもってこらえるつて、どういふことかわからない。もし勇気があつたら、こう言いたかつた。先生、私は考えていたんです。

その文章は十八ページも続いていたので、夏実はだんだん落ち着いてきた。実感としてわからない言葉がたくさん出てくる。壕。艦船。分隊長。少尉。朗読が終わると先生が言つた。

「新出漢字十回、宿題。この章は期末テストには入らないからね。この前渡したプリントを、よく復習しておくように」

そこでベルが鳴り、3 長い長い国語の時間が終わつて、夏実はやつと坐つた。

つぎは美術なので、みんなは彫刻刀や図面をサブバックから出し、それを持って教室を出ていく。手鏡の制作で、先週は糸ノコで板木の型抜きをし、裏面に彫る図柄を描いたのだった。夏実も美術室へとむかつた。級友たちは図柄を見せ合つたりしているが、夏実に話しかける者はいない。廊下の前の

方を、藤山里子と早川麗子が並んで歩いていく。このごろは里子は、同じ班の麗子を頼りにしているようだ。

美術室には大きなテーブルが四つあり、男子と女子が二つずつを占めている。奥のテーブルには吉田典子や坂口光子が坐っていたので、夏実は藤山里子や早川麗子が坐っている方のテーブルの端についた。

私の班にはこれといった個性的な子がいないので、今では大きく典子と光子の班と、里子と麗子の班とに分かれている。そして典子の班は、彼女が表向きはリーダーのようだが、成績の良い光子が組むことでもっと力が増したというか、光子が典子を操っているというか、そんな感じだ。そして麗子は里子を庇うために、光子たちの班と同じように私を無視してバランスを取っている。だから最近、里子はあまりいじめられなくなった。そんなこと気にしてないけど、誰とも話さないでいると息がつまる。これは無視じゃない。みんなそれとなく私を見てるんだもの、と思いつつながら夏実は下絵を描いた紙をひろげた。

「あー、それでは、今日は下絵にそって彫刻しましょう」

と美術の東先生は眼をしょぼしょぼさせながら言った。生徒たちはざわめきながら彫刻に取りかかった。美術の時間はみんなのびのびしている。実技が多いせいもあるが、東先生は少々おじいさんで迫力に欠けるので、みんなはそんな先生をばかにしているところがあるし、絵の好きな人は物足りないらしいけど、4人は東先生が好きだ。安心していられる。それに東先生は、生徒のことを「水野君」「早川さん」と呼んでくれる。生徒を呼び捨てにする先生が多いし、名前も呼ばずに「お前」と言う先生もいる。小学校では呼び捨てにされたり「お前」なんて言われたりしなかったのに、中学校で「お前から」と言われた時は、とてもやな感じがした。

でも、いつのまにか慣れてしまったらしい。授業参観の時に、いつもは「柏木」と呼ぶ国語の金村先生が「柏木さん」と言ったので変な感じがした。

夏実は考えごとをしながら、黙って彫り続けた。

金村先生は機嫌の良い時と悪い時とで、とても教室の雰囲気が違う。それがコワイ。悪い時には（愛のムチ）が活躍する。（愛のムチ）とサインペンで書いてあるから、竹の棒が（愛のムチ）になるのだ。学校は名札が好きらしい。海水着の胸の名札は、油揚げの大きさ。体育着のは食パン二枚分。金村先生は相手によって言葉の調子をつかい分ける。成績の良い子や国語の好きな子には、あまり荒々しい態度はしない。できない子、と決めているらしい

子には、そういう態度がわかる。うちのお母さんもそうだ。直美ちゃんに物を言う時は、どこかばかにしたような感じがある。そういうのって、とてもいや。でも金村先生は今までは、私にあんなこと言わなかったのに……。

夏実が一心に彫っていると、「ほう」という声があった。東先生が斜めうしろから、手元をのぞき込んでいた。

夏実の彫刻の図柄は鳥だった。いつだったか裏庭にスズメぐらいの大きさの鳥がいた。羽根は青灰色で、尾はスズメより長かった。物干し棹に止まって鳴いている鳥をしばらく見ていたら、急に地面に飛びおりてきて、すぐ舞い上がった。クチバシには小さな青虫をくわえていた。それを描いたものだ。

「こういう鳥を見たことがあるのかな？」

と東先生が聞いたので、その時の様子を夏実は話した。すると先生は、その下絵を手を取った。

「あー、みんな、ちよつとこれに注目」

先生はそれを持ってテーブルのあいだを回り、みんなに見せながら、夏実が話したことをみんなに話した。

「このクチバシにくわえているのが花だったら、花喰鳥といって、古くからある図柄です。柏木さんは、よく見ていたから、こんなに生き生きと描けるのかもしれないね」

夏実は少し困った。今はなるべく特別な目立つ立場になりたくない。

「ちよつと話が脱線するが、この前、私と同じ年ごろの、ずっと作文教育をやっている先生と話しました」

東先生はぼそぼそと話した。顔を上げないで手を動かしている生徒もいる。「その先生が言うには、近ごろは海に行った時の作文を書かせても、（海へ行きませんでした。泳ぎました。楽しかったです）というようなものが多いそうです。

五感をつかっているか。海はどんな色をしていたか、どんなふうにならうねっていたか、風をどう感じたか、浜はどんな匂いがしたか。視覚、聴覚、嗅覚、触覚、そういうもので感じていない、というんですね」

「四感しかない」と誰かが言った。

東先生は「あー、もう一つは何かな？ 今は思い出せない」と淡々と続けた。「みんなの図柄を見ると、アニメのキャラクターや、どこかで見た絵八ガキの絵のようなものが多いが、柏木さんは五感をつかっている鳥を見ていたから、こんなに生き生きと描けるんでしょう」

まだ言葉が続くのかと思っていたら、先生は溜息をついて夏実に下絵を返

し、それつきりだったので、水野徹が言った。

「ガクッ」

図工の時間が終わって教室へ帰る途中で、徹がまた調子に乗って言った。

「柏木は点を稼かせぎました。換算内申一・三倍」

高校受験には、家庭科や美術の試験はないが、内申書の点数になるのだ。

笑い声を聞きながら夏実は、5水野君はみんなを笑わせることで、良い子ぶつてると言われぬようにしてるんだと思つた。

美術室から教室に戻ると、今週の給食当番である夏実は、三角巾とエプロンを着けて手を洗つた。ほかのもう一人の当番の女子、男子の当番二人、四人で廊下から給食を運び入れ、黒板の前に立つた。生徒たちは並んで盆に食器をのせ、パンと牛乳を取る。夏実は女子の一人一人が差し出す盆の皿に鱈のムニエルをのせ、もう一人がボウルにシチューをついだ。最後に夏実は自分の分を盆にのせ、机の上に置いてから、廊下へ出てもう一度手を洗つた。

席に着き、スプーンでシチューをすくつて口に入れた時、舌にひっかかるものを感じた。今日のシチューには妙なものが入つている、何だろう、と舌の上でころがしながら考えてみたがわからない。指先で取り出してみた。それは、彫刻の削り屑くずだった。夏実はうつむいたままシチューを見つめた。それからもう一匙ひとすくいすくつてみた。そこにも削り屑が入つていた。今日のシチューはとろりとした茶色だが、表面にばらばらと木屑が散つていたのなら気がついたと思う。誰かが混ぜたとしか思えない。もしそうだったら、席の周りの誰一人として知らない、ということはある得ない。

眼を上げて周囲を見た。みんな何事もなかったように給食を食べている。異常だ、と夏実は思つた。みんな狂つてる。いや、狂つてるのは自分なのかもしれない。だって、みんなこんなに平静なのだから。

夏実は机の右側に付いている鉤かぎに掛けてあつた通学靴かばんを取ると、机の中のペンシルケースやノートを鞆かばんの中なかにしまった。口金をパチンと留めた時、右の席の男子がチラとこちらを見たのを眼の端に感じた。夏実は黙つて席を立ち、うしろの扉かどを開けて廊下へ出た。

校門を出るまで、誰にも出会わなかつた。

6商店街のところまで歩いてきて、初めて、自分が商店街を歩いていることに気がついた。何をしてしまったのだろう。なぜあの時、急に靴を取つたのか、よくわからない。ただ、もうこれ以上ここに居たくない、という気持ちだけになつていた。どうやって学校を出てきたのかも、よく覚えていない。

足元を見ると上履きのままだった。

今のうちに学校に戻らないと、大変なことになるような気がする。でも足はそのまま歩いていく。家への曲がり角も通り過ぎてまっすぐ歩いていく自分は、夢の中にいるようだ。

cシメつた土の匂いと、杉の樹の香ばしい匂いの中に夏実は立っていた。古い神社の鳥居の前だった。崩れかけている石段を上つた。境内には奉納相撲の土俵の跡がある。朽ちかけた社の、鈴を振る赤と白の布をねじつた紐ひもも茶色くなつている。境内の石の上に腰を下ろした。

夏実は境内の周りの林を見上げた。杉のあいだに、何の樹か、紅葉した梢しげも見える。地面のどこかで虫が鳴いている。それが一層、あたりの静けさを感じさせる。

(千刈あがた「黄色い髪」(『千刈あがたの世界6』所収)(河出書房新社)より)

問1 傍線部1「強い勇気をもつてこらえよつて、どういふことだろう」とありますが、夏実は「勇気」をどのように受け止めましたか。その説明として最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 金村先生に注意されても、教科書の内容に対して自分自身が納得するまで徹底的に考えること。

イ 金村先生の要求に対して上手く対応できなかったことを、言い訳せずにとだ黙つて耐え忍ぶこと。

ウ 金村先生に立てと言われて、とても恥ずかしくやりきれない気持ちになつたが、指示通り立ち続けること。

エ 教科書の読むページを間違えたのは、教科書の内容について一生懸命に考えていたからだと言金村先生に言うこと。

オ 教科書に載つていた詩を読んだ時に、分からない表現があつたことについて、周りの生徒の前で先生に質問すること。

問2 傍線部2「体が熱くなり、頭がボーッとして、一行一行の意味などわからない」とありますが、この時の夏実の気持ちを説明した語句として最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 疑心暗鬼
五里霧中
イ 泰然自若
四面楚歌
ウ 茫然自失

問3 傍線部3「長い長い国語の時間」とありますが、国語の時間が長く感じた理由の説明として**不適当なものを次の中から一つ**選び、記号で答えなさい。

ア 授業中に立たされたから。
イ 音読するページを間違えたから。
ウ クラスメイトが誰も助けてくれなかったから。
エ 先生が自分の気持ちを理解してくれなかったから。
オ 教科書の言葉の意味が気になってしかたがなかったから。

問4 傍線部4「私は東先生が好きだ」とありますが、なぜ夏実は他の先生と違って「東先生が好き」のですか。四十五字以上五十字以内で説明しなさい。

問5 傍線部5「水野君はみんなを笑わせることで、良い子ぶつてると言われないようにしてるんだと思った」とありますが、なぜ夏実はそのように思ったのですか。その説明として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「柏木は点を稼ぎました」とふざけた感じで言うことで、今後クラスメイトが水野をばかにするようになると思ったから。
イ ずっこける動作によって、自分に向いていたクラスメイトの不満を水野君自身が代わりに引き受けてくれたと思ってるから。
ウ 美術の東先生から「水野君」と君付けで呼ばれるくらい、クラスから一目を置かれた生徒が、夏実自身に言及してくれたから。
エ おどけながらあえて「点を稼ぎました」と言ってるから。
オ 水野が夏実に話しかけて二人が両思いであることを周りに示すことによつて、一緒にからかわれることを引き受けてくれたと思ってるから。

問6 傍線部6「商店街のところまで歩いてきて、初めて、自分が商店街を歩いていることに気がついた」とありますが、この時、夏実はどのような精神状態になったと考えられますか。その説明として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学校とは何も関係ない大人がいる商店街に来たことで、自分自身が見守られていると心強く感じた。
イ 以前とはまったく違う金村先生の態度に深く傷ついていたため、自分自身の何が悪いか考えられなかった。
ウ 校門を出てから商店街に来るまで誰にも会わずに済んだので、その間に自分自身の現状を冷静に考えられた。
エ 自分自身のことをまったく知らない他人がいる商店街に来たことで、学校での出来事を忘れ去ることができた。
オ 学校から遠く離れた商店街まで来たことによる安心感から、自分自身が今どこにいるか気づく余裕が生まれた。

問7 夏実は自分自身に暗示をかけることで、学校での生活を耐え忍んでいたと考えることができます。夏実はどのような自己暗示をかけていたのですか。解答欄に合うよう七字で抜き出しなさい。

問8 傍線部a、cのカタカナを漢字に直しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

絵本や物語の世界に新たに親しく出会うようになったのは、ずっと後になってでした。じぶんが父親になってからのことで、子どもがいつか文字を読むようになって、ある日子どもが読んでたロシア民話の『おだんごばん』という本を読んで、びっくりしました。新鮮なおどろきでした。それでいい大人が『おだんごばん』にすっかり夢中になりました。「ぼくはてんかのおだんごばん、おまえなんかにつかまるかい」というわけです。そんなふうにして、子どもとおして、子どもの本の読者としてのじぶんをあらためて見つけて、子どもの本の魅力に新たにとらえられました。

子どもとともに、大人として読む。1「言葉をともにする」という読み方

ですが、そうすると、子どもの本の世界というのがどこか遠い世界の話というのでなくて、いま、ここにありえないような近さにある物語として見えてきます。じぶんの心を開く言葉として。

ありふれた世界が、子どもの本の世界では思いがけない世界として見えてきて、何でも無いものがふいに生き生きとした姿かたちをあらわします。たとえばここにコップがあり、茶碗ちawanがある。このコップが歩きだして、茶碗が叫こぼんでもすこしもおかしくないのです。

どうしてというと、それはコップならコップ、茶碗なら茶碗を、まったくちがった仕方で見るという経験であるからで、子どもの本のおもしろさというのは、そうした一つの物なら物、一つの出来事なら出来事を、それはこうなんだとかこうだろうというふうな仕方ではなく、べつの見方を見る、べつの仕方でも経験する、そのおもしろさであり、楽しさだろうと思います。

だから、わたしたちの一日というのが、たとえ平凡な決まりきった、ありきたりな時間の切れはしのようにしか感じられないとしても、ほんとうにそうなのだろうかということ。そうではないのだというのが、子どもの本の世界です。

一日がちがって見えてくる。いい絵本や物語に出会ったあとでは、物のかたちとか人のかたちとか、一日のかたちがちがってつきりとしてくる。そんな確かな感じがのこります。目の向きとか、感じ方、意味の向き方が、その本を読んだことで、何かはどこかで、ぐーっと変わってくることもある。そういう物語や絵本に出会うと、うれしくなる。

そういうことでは、子どもの本の世界のありようというのは、詩の言葉の世界のありようなどと深くかよいあっています。それは、詰めて言うと、隠喩の世界なのです。わたしは、2子どもの本の世界の魅力というのは、ある意味で、隠喩の世界の魅力だと考えています。

隠喩というのは、批評家のウンベルト・エーコが言うように、公認されていない新しい認識というか、新しい感じ方というのを、いつもそのうえにつけています。だからそれは、じぶんの置かれてある世界をそれまでの仕方とはちがった仕方を読んでゆく、読みかえてゆく言葉です。子どもの本の世界は、そうした隠喩の文法に深くつらぬかれています。

物語を読んで、後になってみると、筋立てそのものはつきりと覚えていない。だけれども、そのときその本を読んでじぶんが確実に受けとった何か、鮮やかに心にのこっているということがあります。その物語を通して明

るいところへでてきたという感じがある。それが一つのイメージなり一つの言葉になって、じぶんのなかにのこっている。そのとき心にのこる何かというのは、そこで隠喩の世界をくぐりぬけることによってじぶんが手にした世界の読み方だろうと思う。

ある物語を読んで、とても不思議だなあと思う。その不思議さというのは、物語が不思議だということではないのです。どうしていままでこうは思わなかったんだらうという不思議さです。目が新しくされる。そこで物が一つちがつて見えてくる。その不思議さなのです。ありふれるものはけつしてただありふれてるわけではないし、どんなに明白に見えるものだってけつして見た目ほど明白なのではない、ということ。

そのことを語るができないなら、それがどんなにたくみに語られていても描かれていても、おもしろくも何ともないのです。子どもの本の世界をささえるのは、どうでもいいことをどうにでも語ることはちがう。それは、ほんとうは誰にも見えている。けれども、誰も見ていない。それをはつきり見えるようにすることだ、と思うのです。

子どもの本の世界には、間違う自由がある。間違ってもゆるされるというのではなく、間違いそのものが正しさとおなじだけの価値をもっている。間違うこと自体創造的なことであつて、間違う自由そのものが自由の根拠でもあるというような。ただ、わたしたちをとりまく日常では間違いと正しさとは画然くわぜんと分かれていて、間違うことは悪いことだとされます。どんな問いにもかならず答えがあつて、答えには正しい答えと間違つた答えがあるのだと。

しかし、そうではないのです。間違うことなしに正しさなんてないと思えますし、間違うことができないのはつまらない。間違うことを禁じられた世界というのは息苦しくてやりきれないでしょう。それでもやつぱり、間違うことの容易に許されない、あるいは間違いと正しさがはつきり分けられるような場所に、わたしたちは立たされているということがあると思う。

そうした間違いと正しさがきつかり区切られた世界に、子どもの本はなじまないし、なじむことができません。間違う自由を無くしたら、子どもの本の世界の自由というのは無くなつてしまふだろう。正しさと間違いとはあいられないというのは、二分法の論理です。正しさと間違いとを、たがいがたがいを押しつけるものとして考える二分法の論理は、そこに予断と選別とをつつみもつています。

子どもの本の世界の論理はちがうと思う。あいまいさというところからいさ
れやすいけれども、子どもの本の世界の魅力は3両義性の魅力であって、正
しさも間違いも、ともにまず両義性においてつかまえるところからはじまる。
だから矛盾を怖れないし、荒唐無稽も、まちがいが怖れない。むしろ怖れた
らどうにも何にもならなくなってしまうのです。

子どもの本の世界をつくる言葉は、出来合いの言葉じゃない。それは出来
合いの言葉でできてる世界ではない。その言葉によって始めてじぶんがそ
の言葉を経験したというふうに感じられるような言葉。それは何もAを
てらうような言葉ということではなく、言葉というのはごくありふれたものな
のですから、ごくありふれた言葉がそこで思いがけなく、じぶんにとって初
めての言葉のように立ちあがってくる、というような経験。そういった言葉
こそ手にしたいのです。

子どもの本ではありませんが、ドイツの詩人で劇作家のベルトルト・ブレ
ヒトに『三文オペラ』という広く知られる芝居があります。そのなかで歌わ
れる「海賊ジェニー」という有名なバラード。ロンドンのソホーの貧しい皿
洗い娘の夢をうたった歌ですが、それはメルヘンである歌です。

ジェニーはケチなホテルに働くポロ着た娘です。けれども、そのジェニー
の夢というのは、八枚の帆を張って五十門の大砲をそなえた海賊船が港には
いつてきて、街がべちゃんこにつぶされて地面とおなじになっちゃうこと。
それは、ジェニーがそこにいる現実というのは、際限なくつづいてゆく世界、
絶対変わることはない世界なんじゃないんだ、変えうる世界なんだというこ
とです。それは夢だけれども、わたしたちはそんなふうには、どこかで現実の
包囲をやぶる夢というのをじぶんに見つけようとしながら、いま、ここに
あるのではないのでしょうか。

夢の側から現実をするべく際立たせる、それがメルヘンのもつ力であって、
二進も三進もゆかない行き詰まったところに、実はほんとうの出口がある。
わたしは、エリナー・ファージョンの『ムギと王さま』（石井桃子訳）がとて
も好きですが、その中の「モモの木をたすけた女の子」という話のおしま
いの言葉をいつも思い出します。

「そうかもしれないよ、そうかもしれないよ、どうしてそうでないかわか
るね？」

こちらの安心の世界に揺さぶりをかけてくる。子どもの本のそうしたあり
ようというのは、しかししばしば勝手な仕方で見誤られて、どうかするとす

ぐに、子どもたちの4栄養にいい本をといった掛け声ががちですが、ルー
マー・ゴッデンという子どもの本の作家が怒って言ったことがあります、
子どもの本というのは「本」なのであって、けっして「食料品」なのではあ
りません。

5子どもの本の世界は、名づけることにはじまります。名づけるというの
は、そのものをそのもの名でよぶということです。それは、現実をはつき
りと見る、見つめなおすということ。

子どもの本を読んだあとで、わたしはときどき猛然と動物園にゆきたくな
ることがあります。たとえば物語に、オオヤマネコがでてくる。そうすると
わたしは、オオヤマネコという動物がいると知ってはいるけれども、ほん
とは知らないことに気づく。それで動物園にゆくと、オオヤマネコなんてい
うのはいいのです。シベリヤオオヤマネコがいて、チヨウセンヤマネコが
いて、ウンピョウがいる。そのどれもオオヤマネコだけれども、それぞれに
ちがう。それで一時間ぐらいいじつと見ていると、実におもしろいのです。物
語がそのような仕方でもわりの世界の一つ一つにはつきりと目を向けさせて
くれるということがあります。鳥だっておなじです。鳥という名の鳥はいな
い。木だつてそうです。貝だつて。

空想する力が観察する力を引っぱりだす。と同時に、観察する力によって
空想する力の絞りが深くなる。そうやってまわりの世界の一つ一つとあらた
めて積極的な関係を結びなおす機会を、子どもの本は読むものにあたえてく
れますが、そうした積極的な関係をみずから結びなおすことができはじめ
てわたしたちは、物語のなかにじぶんの場所というものを見いだすのです。

キャサリン・ストーの『ポリーとはらべこオオカミ』（掛川恭子訳）という
小さな本を思い出します。それは実にたのしい本ですが、その本のおもしろ
さというのは、誰でも知っている赤ずきんちゃんとオオカミの話の新しい読
み方で読みなおして、誰もが知っているはずの話からまったく意外な物語を
とりだしてくるおもしろさ。赤ずきんちゃんの物語なら先刻承知とBで
も括るものなら、たちまち足もとをすくわれてしまいます。

当然こうなるはずだという物差しがつかえない子どもの本の楽しさという
のは、そうした自明の世界、既成の世界というものを、疑いやおどろきや好
奇心をもって、生き生きと読みなおしてゆく楽しさです。その楽しさを通し
て、わたしたちのいま、このありようを明るくする物語の世界への通路が、
日常と伝説をつなぐ通路がひらかれるので、疑いやおどろきや好奇心をもつ

というのは、すべてが完了形^{かんりようけい}で語られてしまっているような自明の世界、既成の世界にあつて、なお「なすこと」の夢がいま、ここにあるんだということを見ずから確かめる、あるいは発見するよろこびです。

(長田弘「物語は伝説と日常をつなぐ」)

(『本という不思議』所収)〔みすず書房〕より)

問1 傍線部1「言葉をともしする」という読み方」とありますが、これはどのような本の読み方ですか。最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもの頃を思い出し、身近な世界として物語を読むということ。

イ 大人としての観点からではなく、子どもの視点から物語を読むということ。

ウ 大人であることを忘れることで、じぶんをあらためて見つける言葉として物語を読むこと。

エ 父親として子どもに成り代わって、じぶんが思いもかけなかった物語の読み方をするということ。

問2 傍線部2「子どもの本の世界の魅力」というのは、ある意味で、隠喩の「世界の魅力」とありますが、どのようなことですか。それについて説明した次の一文の「ア」「ウ」にふさわしい言葉をかっこの中の字数に従って本文中から抜き出しなさい。

ある物語を読むことで、それまでは平凡であると思っていたものを

「ア 漢字三字」だと感じるようになり、明白だと思えたものに

「イ 五字」や、「ウ 六字」ができるようになること。

問3 傍線部3「両義性の魅力」にふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 詩の世界

イ 変えうる世界

ウ 際限なくつづいてゆく世界

エ 出来合いの言葉でできている世界

オ 間違いと正しさがきっかりと区切られた世界

問4 傍線部4「栄養にいい本」とありますが、どのような本ですか。不適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 普通の生活をありのままに描いた本。

イ 安心の世界に揺さぶりをかけるような本。

ウ 当然こうなるはずだという物差しが明確な本。

エ ありふれているものをありふれているものとして理解できる本。

問5 傍線部5「子どもの本の世界は、名づけることにはじまります。名づけるというのは、そのものをそのもの名でよぶということです」とありますが、どういうことですか。解答欄に合うように、二十字以上二十五字以内で記しなさい。

問6 空欄A・Bに最適な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A ア 機 イ 気 ウ 奇 エ 喜

B ア はら イ はな ウ みず エ たか

「以下余白」

平成29年度 第2回	国語	受験番号	座席番号	氏名

問6	問5	問3	問2	問二 1	問8	問7	問5	問4	問一 1		
A	現実をはっきりと見つめなおすことで		ア		a	クラスメイトから		45			
B										問2	
			問4	イ		b					問3
				ウ		c					
						った					
	と「」と。					わけではないと思ひ込むこと。					

合計	
----	--